

第一章 東京駅東北幹線ホーム

死体検案書

氏名	江副 浩正		①男 2女	生年 月 日	明治 50 大正 平成	11年 6月 12日	
死亡したとき	平成 25年 2月 8日 午前 10時 20分						
死亡したところ及びその種類	死亡したところの別 ①病院 2 診療所 3 老人保健施設 4 助産所 5 老人ホーム 6 自宅 7 その他						
死亡したところ及びその種類	死亡したところ 東京都千代田区神田駿河台1丁目 8 番地 13号						
死亡したところの類別施設の名称	駿河台日本大学病院						
死亡の原因	手術	(7) 直接死因	肺炎		発病(発症)又は受傷から死亡までの期間	約8日間	
		(4) (7)の原因	重症頭部外傷				
		(9) (4)の原因					
		(2) (9)の原因					
II		肝硬変			不詳		
死亡の原因	手術	① 無 2 有		手術年月日	平成 25年 2月 8日		
解剖(生体解剖)	1) 重症頭部外傷 a) 後頭部の打撲傷、同部位を起点とする線状骨折 b) やや端部の急性硬膜下血腫、外傷性くも膜下出血 c) 高度の脳腫脹と溶解 d) 病的脳動脈瘤/溶解例 2) 二次性肺炎 3) B型ウイルス性肝硬変						
死亡の種類	1 病死及び自然死 外国死 不慮の外国死 { 2 交通事故 ③ 船舶 転落 4 溺水 5 煙、火災及び火傷による傷害 6 窒息 7 中毒 8 その他 } 12 不詳の死 その他及び不詳の外国死 { 9 自殺 10 他殺 11 その他及び不詳の外国 }						
外因死の追加事項	傷害が発生したとき	平成 25年 1月 31日 午前 10時 20分		傷害が発生したところの種別	1 住居 2 工場及び業務現場 3 道路 ④ 他(駅構内)		
外因死の追加事項	手段及び状況	東京駅構内で転倒					
生後1年未満で病死した場合の追加事項	出生時体重	グラム	単胎/多胎の別	1 単胎 2 多胎 (子中胎 子)	妊娠週数	週 選	
生後1年未満で病死した場合の追加事項	妊娠・分娩時における母体の病態又は異状	1無 2有 [] 3不詳		母の生年月日	和年 月 日 平成		
その他特に行なすべきことがら							
上記のとおり検案します。	検案年月日	平成 25年 2月 9日		東京都文京区大塚四丁目21番18号	本書発行(死因決定)年月日	平成 25年 2月 21日	
東京都監察医務院	(氏名)	東京都監察医		齋藤 一之(鑑)			

この謄本は原本と相違無いことを認証し、(日本工業規格A列4番)

平成 25年 3月 28日
東京都監察医務院長 福永龍繁



二〇一三年一月三十日二十時前。江副浩正は、運転手に東京駅の八重洲口まで送ってもらおうと、東北新幹線の改札に向かった。最近ではめつきり歩幅が狭くなり、歩行もおぼつかない。その頼りない足取りで、小さなポストンバッグを手に駅構内をゆつくりと歩いていく。途中、コンビニで缶酎ハイを買い込んだ。そして、二十時十六分発のはやぶさ三十五号に乗る。のどがいがらっぽいのか、時折ごほごほとせき込みながらも缶酎ハイに手を伸ばす。

ポストンバッグから「会社四季報」新春号を取り出し、開く。この号は重要だ。三ヶ月決算企業の間決算情報と当期の業績計画が同時に掲載されている。その二つを並べ比べると、数字があまりにも乖離乖離している企業が必ず見つかる。その裏にはきつとなにかある。それを「会社四季報」から読み解いていくのだ。

最近はコンピュータを使った株売買が主流だが、江副にはそこがわからない。

「会社四季報」の数字を読み込み、だれも目をつけない事業の萌芽や、破たんにいち早く注目する。そして、事業家江副浩正の直感で投機銘柄を割り出し、思い切り仕掛けるのだ。それが株の醍醐味。なのに、コンピュータに判断を任せるなど信じられない。

やがてある薬品化学業のページで手が止まった。薬品会社の第二四半期の決算報告と第四四半期の事業計画の数字が、あまりにもかけ離れている。何かあるに違いない。けれども、株価は安定している。誰も気づいていない経営破たんの芽をこの会社は抱えているに違いない。江

副の直感が危険信号を打ち鳴らす。また、缶酎ハイをこぐりとやる。これだ。思い切り「売り」から入ろう。そう決めた。江副の決断はいつも早い。

誰にも邪魔されない、二時間ちよつとの至福の時を江副は過ごした。

そしてはやぶさ号は盛岡駅に滑り込んだ。ホームに降り立つと冷気が江副の全身を包む。さすがに寒い。ブルツと震える。風邪か。それとも、少し酔ったのか。あるいは、車内で発見した、薬品会社の不自然な数字に思わず体が興奮してしまったのか。

駅を出ると、背を曲げながらよちよちと歩いた。タクシー待ちのロータリーまで雪に足をとられないよう、さらに狭い歩幅で歩く。老いた孤愁の姿が、雪の闇夜に浮かぶ。そこには、かつてマスコミが江副に与えた「東大が生んだ戦後最大の起業家」「素手でのし上った男」「民間のあばれ馬」などのキャッチフレーズのどれ一つとて、ほうふつさせるものはない。

江副の乗ったタクシーは凍りついた高速道路の闇を安比高原に向かって進む。暗闇のなかで振り返る。まだ新幹線も通っておらず、日本のチベットといわれたこの地に江副は注目した。無謀だといわれるなかで、この安比をヨーロッパアルプスのどこにも劣らぬ冬季リゾート地として開発しようとしたのだ。そのよき相談相手となったのが、グラフィック・デザイナーとして世界に名を馳せる亀倉雄策である。二人で熱く語り合い、計画を練り、山をいっきに削り取ってアルペンコースを作った。ゲレンデのすぐそばには、コンドミニウム方式のホテル。二

人で興した安比高原は、開発面積千五十九万坪、山手線内側の三分の二の広さを誇る日本有数の一大リゾートタウンとなった。

株の世界に没頭する新幹線の二時間。亀倉とともに過ごした思い出に浸る一時間。江副にとって、東京と安比は、あつという間にたどり着く、短い距離だった。そして車は、ホテル安比グランドの車寄せに滑り込む。

到着が二十三時を回ったにもかかわらず、佐々木覚美が笑顔で迎えてくれた。

彼女と初めて出会ったのは、江副が開発したゴルフ場としては二つ目となるメイプルカントリークラブがオープンしたときのことだから、もう二十七年もの長いつきあいになる。

堤清二が経営の立ちいかなかった太平洋クラブを買い取り、全国でメイプルカントリークラブを展開することになった。岩手県下にもそのゴルフ開発用地が一カ所あった。年は違うが、東大卒の起業家として、同じ時期に実業界にデビューした堤だ。彼が乗り出せば、江副が手掛けた安比高原のゴルフ場は県下ナンバーワンになるのは目に見えていた。日ごろから「二位に甘んじるな。それは己の死を意味する」と公言してきた。結果、着手したどの事業分野でも一位の座を守り続けてきた江副としては、とても我慢できることではなかった。自ら堤のもとに乗り込むと深々と頭を下げ、堤に頼み込んだ。

「どうか岩手県に限って、メイプルの権利を私に譲っていただけませんか」

八六年秋、メイプルカントリークラブのプレオープン前日になった。堤の手前、さすが東京で仕事をしていても、明日の天気が気になった。現地の様子はどうか、秘書に問い合わせるよう頼んだ。

「夕焼けがとてもきれいだから、明日は快晴ですとフロント係が言っています」

秘書からの風情ある返事を聞くなり、江副は受話器を奪い取るとたずねた。

「あー、江副だけど。君はだれ」

「佐々木覚美と言います」

「かくみ、どんな字を書くのかな」

「覚悟の覚に、美しいです」

「そう、そんなに夕焼けがきれいなもの。だから明日は快晴ね。覚美は頭がいいね。ありがとう」

翌日、朝早く東京から乗り込んだ江副は、フロントに入るなりたずねた。

「覚美はどこ？」

なにか怒られるのだろうか、困った顔で立ちすくむ二十三歳の佐々木に頭を下げた。

「ありがとう。こんな快晴だ。覚美の風情ある予言のおかげで、本当にきれいな快晴になった」

以来、都会人にはない朴訥ぼくとつさと「覚悟の美しさ」を感じさせる立ち居振る舞いが気に入り、何か

かといえば「覚美、覚美」とかわいがってきた。

八九年二月十三日にリクルート事件で逮捕されてからの百十三日間、密室での過酷な尋問が続いた。神経が異常をきたしていくのが自分でもわかった。耐えきれず、言われるままに調書に署名すると釈放された。しかし、二カ月たつても傷ついた神経は回復しない。医師の勧めで安比に移った。そのとき、今日のような笑顔で迎えてくれた彼女の顔を見て、思わず吐露したものだ。

「覚美、僕は死にたいよ。これまでお世話になった方々の人生を僕は変えてしまった」

「死んでどうなるんです。変えてしまったみなさんの、その人生を見届ける責任が江副さんにはあるんじゃないですか。生きて全うしてください」

以来二十余年、覚美の言葉を糧に生きてきた。

「体温計あるかな。せきが止まらない」

覚美が体温計を探してきてくれる。三十六・八度。大したことはなさそうだ。江副はコンドミニアムの自分の部屋に入った。この空間が一番落ち着く。平熱に安心し、江副はすぐに眠りに落ちた。

翌一月三十一日、部屋のブラインドを開けると、あいにくの曇り空だった。ゲレンデから前森山頂上まで続く千三百メートルのスロープも、途中から曇って頂上は見えない。朝は芋粥を作ってもらった。これなら食が細い江副でも、ご飯茶わん一杯は食べられる。芋が体にいいと

聞いて、このところ一カ月は芋ばかり食べていた。

太平洋戦争の開戦から一年、大阪に住んでいた少年江副が、父、良之の実家がある佐賀市城内に疎開した日に食べた芋の味が忘れられない。幼いながらも九州の芋と大阪の芋の味の違いに驚く。そのうまさ、親元を離れ知らない町に来たさみしさをわずかながらも薄めてくれた。舌が少年期の思い出を求めるのか、目の前に広がるゲレンデを見ながらサンルームテラスで味わう芋粥は、なにもものにも代えがたい口福だった。

体も温まった。今日も思い切りロング滑降に挑もう。江副は、九時にゲレンデに立ち、ゴンドラに向かった。安比スキースクールの高橋正造コーチが、一緒にゴンドラに乗り込む。スキーはいくつになっても到達点がない。日々が勉強だと思おう。プロの目で欠点をその都度、指摘してもらおうことが大切なのだ。

亀倉がそうだった。いつもプロコーチとともに滑り、その指摘に熱心に耳を傾けた。九七年五月、そのシーズン最後のスキーを楽しむ亀倉は、安比のコブに足をとられて転倒した。むち打ち症になり、東京築地の聖路加国際病院に転院したのち、忽然と八十二歳で逝ったのである。世界に名だたるデザイン界の巨匠は、死の直前まで、そのスキー技術を高めようと真摯に学び続けた。そして自らが造ったコースで死ぬ。自分もかくありたいと願うが、こればかりはいかんともしがたい。

ゴンドラが頂上に着いた。江副は千三百メートルを滑り下りる。その後を、高橋がびたりとついた。このところ室内でも転倒を繰り返して、歩道で転んで救急車騒ぎを起こしていた。なのに、スキー板を履けば足元はびしりと定まり、千三百メートルを滑降できるのだ。江副は、世界の名スキーヤー、トニー・ザイラーを招いて造ったザイラーコースに回ると、そのダイナミズムを心の底から楽しんだ。

再びメインゲレンデに戻った江副は、高橋に言った。

「もう一本行こう」

「すみません、今日はこれで勘弁してください。腰が痛くて、疲れました」

高橋が「疲れた」と言うときは、すなわち江副の滑りが危なっかしいときだった。転ばないように、ケガをしないように、高橋はいつも江副に万全の気を配っている。

本人は気付いていないが、この日の江副の足元はいつになくおぼつかなかった。これ以上滑ると危ないと見た高橋は、自ら疲れたと申し出て危険を回避したのである。

ゲレンデを早々に引き上げると、ロビーで覚美と出くわした。

「今朝はもうあがりですか。珍しく早いですね」

「正造君が疲れたと言うものだからさ。僕より若いのにね。でも、たまにはやさしくしてやろうかと思って、素直に言うこと聞いたよ。覚美、盛岡まで送ってよ」

部屋に戻ると、携帯電話を取り出した。江副の株運用を任せる証券会社社長の水谷文彦を呼び出す。

「スキーはいかがでした」

「天気が心配だったけれど幸い崩れずに、いい滑りができました。で、新しい銘柄をちよっと仕掛けたいと思って、お願いの電話です」

江副は、昨夜の新幹線のなかで注目した、薬品会社の名前を告げた。

「ほう」

声の感じで、意外な銘柄を告げられ驚く水谷の様子が、手に取るように伝わってくる。しかし、なぜと聞き返したり、止めたりしないところが水谷のいいところだ。

ダイエーの中内^{しんない}切にリクルート株を売却した後、大手の証券会社は、江副をババ抜きのパバ扱いし、信用取引もままならなくなった。困り果てた江副の前に現れたのが水谷だった。

「社長からぜひお役に立つようにとの命を受けました」

名古屋に本社のある証券会社社長とは「日本青年社長会」(YPO)で知り合った仲だ。ちよつといわくありげな銘柄に手を出すとき、江副の名前がでては困るときなどには、決まって水谷の世話になった。以来、二十年近く江副の資産運用管理は、ほぼ水谷に任せてきた。

江副が必要とする情報だけを的確に流してくれる。その情報をもとに、「会社四季報」を丹念

に読み込み、独自の勘で江副がこれと見立てた銘柄の仕掛けにはとことんつきあってくれる。先代社長の引退時、その社長が後継を水谷に指名したときには、自分のことのように喜んだ。男の子をもたぬ江副は、水谷がわが子であつたらと何度も思つたものだ。

その水谷は、江副の発した思いもよらぬ銘柄に、なぜと詮索するでもなく、まして止めることもなく、冷静に尋ねてくる。

「で、何株ほど」

少し興奮気味に、江副は株数を告げた。

「わかりました。弊社だけでは扱いかねる株数ですが、何とかします」

水谷の返事に安心しながら、あといくつかの銘柄の売り買いを江副はその場で立て続けに指示した。

水谷との電話を切ると、十二時に、江副は覚美の車で、盛岡に向かった。

「そうそう、言うのを忘れていました。三ヶ田さんの息子の泰良君が先週、岩手の中学総体の複合で優勝しましたよ」

安比スキー場の開業と同時にリクルートの社内にスキー部を創設し、江副自らが部長に就いていた。そのスキー部の三ヶ田礼一が九二年の冬季アルペールビル・オリンピックで、ノルディック複合団体に金メダルを獲得したのである。日本スキー界のレベルの高さを世界に認知

させ、リクルート社内を興奮の渦に巻き込み、地元の子供たちに大きな希望を与えた。

その金メダリストの子供が中学生になり、親と一緒に道を選んだ。早くもその力量を表したという。江副には、それがことのほかうれしかった。

「そうか、それはよかった。息子もオリンピックをめざすのか。これは協力しないとな」

そんな話をしているうちに、盛岡に着く。覚美がロータリーに車を入れた。よろよろと駅に降り立った江副は、手にしたバッグをひよいと上げる。

「また来週。それでは」

たった一泊の旅だったが、誰も気づいていない新たな仕掛けの銘柄を見つけ、いい滑りができた。その満足感をかみ締めながら、江副は十三時七分発のやまびこ四十八号に乗り込んだ。もう車中で「会社四季報」を広げることもなく、缶酎ハイを二缶も空けた。江副にしては珍しいことだった。

午後三時を回る。その日の株商いが終わった。江副はデッキに出ると、水谷に電話した。

「いかがでしたか」

「ご指示いただきました、本日の商いは、無事すべて終わりました」

江副のその日の売買は、不動産投資信託の返済売り、ゼネコン株の返済買い、そして薬品株と地方電力株の新規売りだった。

「ありがとう、ご苦労さま。また明日も頼みます。それでは」

それが生涯最後の言葉になるとは知らぬまま、江副は電話を切った。席に戻り、しばらく寝入る。十六時二十四分、やまびこ四十八号は東京駅のホームに滑り込んだ。酔ったのだろうか、網棚にポストンバッグを置き忘れたことに江副は気が付かない。列車からホームに降りるとき、足がもつれた。少しバランスを崩すが、踏みとどまるとホームから改札口に向かって歩き始める。

一步を踏み出す。また一步。だが、体はそれに逆らうように、そのまま後ろに倒れた。ホームの後頭部がたたきつけられる。十六時二十八分、脳骨が割れる音が鈍く響いた。

江副の後ろを歩いていた乗客が叫ぶ。駅係員があわてて駆け寄って来る。だが、そのときにはすでに、江副に意識はなかった。

駿河台日本大病院（現・日本大病院）に向かう救急車。救急隊員が倒れた男の素性を知らうと持ち物を調べる。だが、身を明かすものは出てこない。同じころ、網棚に残されたポストンバッグからは百万円を超える現金が出てきて、別の騒ぎになっていた。

やがて遺留品から、倒れた男が江副と判明した。

病院に運び込まれて、そのまま眠り続けた江副浩正は、一三年二月八日、十五時二十分、息を引きとった。享年七十六だった。